

「 囲いの外にいる羊をも 」

イザヤ書 56章1節～8節
ヨハネによる福音書 10章7節～16節

説教 軽込 昇牧師

主イエスには、はっきりとした相手がいます。二人というより二つのグループと言った方がよいでしょう。まずユダヤ人の指導者たちです。主イエスは、まるで挑戦するように彼らに向かって「わたしはよい羊飼いです」と言われました。旧約聖書では、彼らこそ羊飼いにたとえられ、民を養う務めを神さまから委託されました。しかし、彼らはその務めを放棄してしまっていたので、ますます主イエスへの憎しみを募らせました。

讚美歌21-200「ちいさいひつじが」には、どこまでも羊を追い、抱きしめてくれるやさしい羊飼いが歌われます。主イエスが、ご自分を「良い羊飼いだ」とおっしゃっているのは全く違う意味です。

「わたしは羊のために命を捨てる」。なぜ、主がむごい十字架にかかれねばならなかったか。ここが私たちの信仰の急所です。私たちは誰でも内面に自分でもどう処理してよいかかわらない罪と呼ばれる問題を抱えています。心のもち方では何ともならない問題、主イエスは、私たち自身ではどうしようもできない罪を贖う、贖い主です。

罪の問題は、主イエスがユダヤ人の指導者の次に相手とされる、第二のグループに関わります。「よい羊飼いは羊のことをよく知っている」と主は言われます。聖書ではモノについて「知る」という言葉を使いません。人格的な関係を示します。「愛」と深く結び付きます。主イエスは私たちのことをよく知っておられ、愛してくださる。私たちの真の裁き主であり、私たちの罪の責任を取ってくださる救い主です。主イエスは、この恵みの言葉を、自分たちはキリストとは無関係だ、と「囲いの外にいる羊」のような人たちにこそ伝えたいのです。

イザヤ書56章1～8節には宦官が出てきます。異邦人であり、宦官であるこの人は神の恵みから遠い存在です。しかし、必死に神を求めています。使徒行伝8章に出てくるエチオピアの宦官はエルサレムからの帰途、聖霊が遣わされたピリポの助けを得て、主イエスに出会い、喜びにあふれ、今も北アフリカに伝わるコプト・キリスト教の最初の一人となったと伝えられています。囲いの外にいた羊が1匹、主の囲いの中

に入れられたのです。

本当の羊飼いの元に帰るべきだといわれても、どこにその羊飼いがいるのか、本物の羊飼いをいくら探し求めても、見つからないではないかという人がいるかもしれません。キリスト教は伝道の宗教です。心を閉ざしている方、私には神は関係ない、と思い込んでいる方々に向かって、もう一度神さまを礼拝しましょう、とお誘いすることです。例えば、主イエスが復活したという知らせを受けながら、心の中では喜んでいますが、この手でキリストの釘の跡に触れ、わき腹の槍の跡に触らないかぎり信じない、とうそぶいていたトマスに、もう一度主イエスを礼拝しよう、と誘った十人の仲間たちの信仰が、私たちにも欲しいのです。熱心な信仰と熱心な祈りです。

二つのグループがあるのです。主イエスを十字架につけてしまった人たち、もう一つは、主イエスご自身が恵みを伝えたいと強く願い、しかし、なかなか主イエスのお言葉に心を開かない人たちです。主イエスが、何とかご自分の囲いの中に入れたい、と強く願っておられる方、それが私たちであり、また私たちの家族、友人、私たちに深く関わっている人たちです。私たちは誰もが、囲いの外にいる羊です。しかし、主イエスはその囲いの外にいる羊をご自分のものにしたい、と願っておられる、それは私たちにとって、慰めです。何とかして、主イエスの言葉を伝えたい、それが今、私の祈りです。

このあと歌う21-385は、良い羊飼いの御手の中にある幸いな羊の姿を歌っている讚美歌です。前にいた教会では、神の御許に召された方を覚える時に礼拝で歌いました。大切なのは4節です。「この日 目を閉じれば 思いうかぶのは この友を包んだ 主の光」。

私も葬りの時に歌って欲しい讚美歌のリストに入れてあります。今、私が祈りに覚えている方も、この主の光の中にいることを信じています。しかし、もし許されるなら、お互いに命あるうちに、一日も早く共に同じ主を見上げたい、と願い、祈っています。すでにその人が主の光の中にいることを信じている故に、さらに祈るのです。